



同志社大学文化情報学部蔵 『源氏絵所屏風言葉書』 翻刻と考察(行幸巻～幻巻)

著者	福田 智子, 山本 愛奈, 李 羽, 耕三寺 華蓮, 大久保 孝晃, 徐 嘉楓, 胡 淑雲
雑誌名	文化情報学
巻	14
号	2
ページ	38-28
発行年	2019-03-31
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2020.0000000135

同志社大学文化情報学部蔵 『源氏絵所屏風言葉書』 翻刻と考察（行幸巻〈幻巻〉）

福田 智子・山本 愛奈・李 羽・耕三寺 華蓮
 大久保 孝晃・徐 嘉楓・胡 淑雲

本稿は、「同志社大学文化情報学部蔵『源氏絵所屏風言葉書』翻刻と考察（桐壺巻〈野分巻〉）」に引き続き、当該書の御幸巻から幻巻の本文系統と、それが指し示す源氏絵の図柄を類型に照らして考察するものである。本文は、北村季吟『湖月抄』（延宝三年〈一六七五〉刊）と一致する帖もあるが、青表紙本系統の三條西家本との共通性が目立つ。また、本書が示す図柄を『源氏物語』承応三年（一六五四）版本の挿絵と比較すると、共通するものも多いが、幻巻では、紫上の死に関連した通常の類型的な場面を避けるといった図柄の選択が行われていると考えられる。

凡例

一、冒頭に、巻の通し番号と巻名を示す。

一、翻刻本文は、漢字・仮名ともに通行の字体を用いるが、できる限り

本書の原態を尊重する。

1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。

2、濁点や句読点は付さない。

3、改行や字下げなどは、可能な限り原本の字の配置を生かす。

一、校異は、表記の相違は示さず、語の異なりのみを示す。異同箇所は

「絵所」本文の行数を付して挙げる。

【校異1】北村季吟『湖月抄』（延宝三年〈一六七五〉刊）本文との比較

を行う。『湖月抄』のテキストは、『源氏物語湖月抄（中）増注』『源氏

物語湖月抄（下）増注』（北村季吟著・有川武彦校訂、講談社学術文庫

315・316、一九八二年五月）に拠り、「絵所」の該当箇所を、中（あるいは下）

一頁一行（本文の行数）と記す。また、異同箇所は「絵所本文↓湖月抄

本文」の順に示す。

【校異2】『源氏物語大成』（中央公論社、一九八九年八月普及版再版。

略称「大成」）に拠り、「絵所」の該当箇所を、巻数―頁（底本の名称）

と記す。

「絵所」の「大成」底本との異同箇所について、「絵所」本文と一致する伝本がある場合には、「Ⅱ」を用いて、その伝本の名称を本文系統の略号とともに記す。

- ・青表紙本系統 〈青〉
- ・河内本系統 〈河〉
- ・別本 〈別〉

次に、異同箇所を、「絵所本文⇕大成底本文」の順に示す。

最後に、「絵所」と全文が一致する伝本を、系統の略号とともに※を付して挙げる。

- 一、「絵所」本文の『源氏物語』における【該当箇所】を示す。角川古典大観『源氏物語』CD-ROMに拠り、その箇所を含む節の見出しを挙げるとともに、同CD-ROMの「参考情報」機能を用いて、以下の校訂本文の該当巻数・頁数を列挙する。
 - ・日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「大系」
 - ・新日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店） 略称「新大系」
 - ・日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「全集」
 - ・新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館） 略称「新全集」
 - ・新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社） 略称「集成」
 - ・角川文庫『源氏物語』（角川書店） 略称「文庫」
 - ・玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店） 略称「評釈」
- なお、見出しは、必ずしも「絵所」の本文を過不足なく説明するものではない。

二九 御幸

【翻字】

藏人の左衛門の尉を御使にてきし一枝たて

まつらせ給ふおほせことにはなにとかやさやうのおり

のことまねふにわつらはしくなん

雪ふかきをしほの山にたつ雉子のふるき

あとをもけふはたつねよ

【校異1】「湖月抄」中1512-7/異同なし

【校異2】「大成」3-887（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」左衛門の尉Ⅱ〈青〉肖柏本・三條西家本・大島本（底本）「右」朱の見せ消チ、「左」朱の書き入れ）・御物本（「右」墨見せ消チ、「左」墨書き入れ）、〈河〉すべて（七毫源氏・高松宮家本・大島本・鳳来寺本・尾州家本）、〈別〉陽明家本・保坂本⇕右衛門のせう（本行本文） ※全文一致本文・肖柏本・三條西家本

【該当箇所】「4」物忌みのため供奉しなかつた源氏は、大原野に酒、くだものなどを届け、帝と歌の贈答 「大系」3-69、「新大系」3-61、「全集」3-285、「新全集」3-293、「集成」4-150、「文庫」5-81、「評釈」6-35

三〇 ふちはかま

【翻字】

らにの花のいとおもしろきをも給へりけるをみすの

つまよりさし入てこれも御らんすへきゆへは有

けりとてとみにもゆるさてもたまへれはうつたへに

思ひもよらてとり給御袖をひきうこかしたり

おなし野、露にやつる、藤はかま哀はかけよ

かことはかりも

【校異1】「湖月抄」中一551一2／異同なし

【校異2】「大成」3一920（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

【4】思ひも（青）御物本・伝慈鎮筆・池田本・肖柏本・三條西家本、（河）すべて（高松宮家本・尾州家本・平瀬本・鳳来寺本・大島本）（思）

※全文一致伝本・（青）御物本・池田本・三條西家本

【該当箇所】「3」夕霧は蘭の花をさし入れ恋の思いを訴えるが、玉鬘は困惑して奥にひき入る 「大系」3一102、「新大系」3一93、「全集」3一324、「新全集」3一332、「集成」4一187、「文庫」5一107、「評釈」6一146

三二 まきはしら

【翻字】

東おもてのはしらを人にゆつる心ちし給も

あはれにてひめ姫（ママ）ひはた色のかみのかさねた、

いさ、かにかきてはしらのひわれたるはさまに

かうかいのさきしてをしいれ給ふ

今はとてやとかれぬともなれきつるまきの

はしらはわれをわするな

【校異1】「湖月抄」中一590一12／「2」ひめ姫（ママ）ひめ君

【校異2】「大成」3一951（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

【2】ひめ姫（ママ）ひめ君 「2」ひはた色（青）大島本（底本）（「ひはわた色」

の「は」朱の見セ消チ）御物本・為家本・池田本・肖柏本・三條西家本、

（河）全て（七毫源氏・高松宮家本・平瀬本・大島本・鳳来寺本・尾州

家本）、（別）全て（陽明家本・保坂本・伝冷泉為相筆・麦生本・阿里莫

本）（思）ひはわた色（本行本文） ※全文一致伝本・なし。ただし、明ら

かな誤写による異同一箇所「2」ひめ姫（ママ）ひめ君を除けば、（青）為家本・

池田本・肖柏本、（河）高松宮家本・平瀬本・大島本・鳳来寺本・尾州家本が一致する。

【該当箇所】「14」姫君は家を離れる悲しみに真木の柱の歌を詠み、別々になる女房たちも悲しみの歌 「大系」3一135、「新大系」3一127、「全集」3一365、「新全集」3一373、「集成」4一225、「文庫」5一134、「評釈」6一244

三二 梅かえ

【翻字】

れいのしん殿にはなれおはしましてかき給ふ花盛過

てあさみとりなる空うら、かなるに古きこと、もなと

思ひすまし給て御心のゆくかきりさうのもた、のも

女手をいみしうかき盡し給ふおまへに人しけからす

女房三三人はかりすみなどすらせ給てゆへあるふる

き集のうたなといかにそやなとえり出給ふにくちお

しからぬ限さふらふみすあけわたしてけうそく

のうへにさうしうち置はしちかくうちみたれて筆

のしりくはへて思ひめくらし給へるさまあくよなく

めてたし

【校異1】「湖月抄」中一634一6／異同なし

【校異2】「大成」3一985（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「4」女手を「青」三條西家本↓女ても ※全文一致伝本…なし。ただし、音便の異同一箇所（「4」いみしう↓いみしく）を除けば、三條西家本が一致する。

【該当箇所】「10」夕霧、柏木などに葦手、歌絵を書くように求める消息、源氏も草仮名などを自ら書写 「大系」3一171、「新大系」3一162、「全集」

3一409、「新全集」3一417、「集成」4一266、「文庫」5一163、「評釈」6一359

三三 藤裏葉

【翻字】

ふちのうら葉のとうちすんし給へり氣色を給はりて

頭中将花のいろこくことにふさなかきをおりてまら

うとの御さかつきにくはふとりてもてなやむにおと、

むらさきにかことはかけむ藤の花まつよりすきて

うれたけれども宰相さかつきをもちながらけしきはか

り拝したてまつり給へるさまいとよしあり

幾かへりつゆけきはるをすくしきて花のひも

とくおりにあふらむ

【校異1】「湖月抄」中一653一4／「1」給へり↓給へる 「1」氣色↓御氣色 「6」給へる↓給ふ

【校異2】「大成」3一1002（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「1」給へり↓給へる 「1」氣色↓御氣色 ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「6」内大臣は夕霧に酒を勧め、雲居の雁とのことで恨みごとを述べ、結婚するよう求める 「大系」3一189、「新大系」3一181、「全集」3一430、「新全集」3一438、「集成」4一286、「文庫」5一176、「評釈」

6一416

三四 わかな上

【翻字】

つま戸をしあけて出給を見たてまつり送る

明くれの空に雪のひかりみえておほつかなし

名残とまれる御にほひやみはあやなしと独こたる

ゆきは所／＼きえのこりたるかいとしろき庭

のふとけちめ見えわかれぬほとなるになを

残れるゆきとしのひやかにくちすさみ給つ、

みかうしうちた、き給もひさしくか、ることなか

りつるならひに人／＼もそらねをしつ、

や、またせ奉りて引あけたり

【校異1】「湖月抄」中一733一6／「3」名残↓名残まで

【校異2】「大成」4一1062（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「3」名残↓名残まで ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「24」源氏は夢に紫の上を見、雪の降るまだ暗いうちに紫の上の部屋に戻り、一日慰めくらす 「大系」3一251、「新大系」3一244、「全集」4一62、「新全集」4一69、「集成」5一60、「文庫」6一51、「評釈」7一117

三五 わかな下

【翻字】

わらはなりしより朱雀院のとりわきておほしつか

はせ給ひしかは御山住にをくれきこえては此宮にも

したしう参り心よせきこえたり御ことなどををしへ

きこえ給とて御ねこともあまた

つとひ侍りにけりいつらこのみし人はと

たつねみつけ給へりいとらうたくおほ

えてかきなてつゝゐたり

【校異1】「湖月抄」中一821一3／「2」此宮↑またこの宮 「5」人は

↑人か 「5」たつね↑尋ねて

【校異2】「大成」4一1127（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」此宮＝〈別〉阿里莫本↑又この宮 「5」たつね↑たつねて 「7」

かきなてつゝ↑かきなて、 ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「4」柏木は春宮に女三の宮の猫のかわいらしさを述べ、手

に入れたところで柏木が預かり取る 「大系」3一320、「新大系」3一

313、「全集」4一149、「新全集」4一157、「集成」5一143、「文庫」6一113、「評

釈」7一273

三六 かしは木

【翻字】

しそくめして御かへし見給へは御手もなをいとかな

けにおかしきほとにかいたまひて心くるしう

きゝなからいかてかはたゝをしはかりのこらんと

あるは

たちそひてきえやしなましうきことを

おもひみたるゝ

煙くらへに

【校異1】「湖月抄」中一955一8／異同なし

【校異2】「大成」4一1232（底本…定家本 藤原定家筆） 異同なし。

※全文一致伝本…〈青〉定家本（底本）・大島本・肖柏本・三條西家本

【該当箇所】「4」柏木は女三の宮の文を読み、力をふりしほつての返し、

乳母は衰弱のさまを嘆く 「大系」4一16、「新大系」4一9、「全集」

4一286、「新全集」4一296、「集成」5一273、「文庫」7一24、「評釈」8

一38

三七 よこふゑ

【翻字】

すこし寝入給へる夢にかの衛門督たゝ有しき

まのうちきすかたにてかたはらにゐてこのふゑを

とりて見るゆめのうちにもなき人のわつらはし

うこのこゑをたつねてきたると思ふに

笛竹のふきよる風のことならばすゑの世なか

きねにつたへなん

【校異1】「湖月抄」下一15一10／「5」笛竹の↑笛竹に

【校異2】「大成」4一1279（底本…大島本 飛鳥井雅康筆）

「5」笛竹の↑笛竹に ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「8」夕霧の夢に柏木が現れ、笛を子孫に伝えてほしいとの

歌、若君が泣きだし乳を吐く騒ぎ 「大系」4-66、「新大系」4-58、「全集」4-347、「新全集」4-359、「集成」5-333、「文庫」7-67、「評釈」8-197
4-370、「新全集」4-382、「集成」5-353、「文庫」7-81、「評釈」8-247

三九 夕霧

三八 すゝむし

【翻字】

おほかたの焔をはうしとしりにしをふりす
てかたきすゝむしのこゑと忍やかにの給ふいとな
まめいてあてにおほとかなりいかにとかやいて思
のほかなる御事にこそとて

心もて草のやとりをいとへともなをすゝむし

のこゑそふりせぬなときこえ給て琴の御ことめ
してめつらしく引給ふ宮御すゝひきをこたり〇^給て
御ことに猶心いれ給へり月さしいて、いとほなやかなる程
もあはれなるにそらをうちなかくて世中さまくにつ
つけてはかなくうつりかはるありさまもおほしつ、
けられてれいよりも哀なるねにかきならし給

【校異1】「湖月抄」下-36-7 / 「7」ひきをこたり〇^給て↓ひきおこた
り給ひて

【校異2】「大成」4-1297（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「7」宮Ⅱ〈青〉西下経一氏蔵（「宮の」の「の」見セ消チ）↓宮の

「7」ひきをこたり〇^給て↓ひきおこたり給ひて ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「5」八月十五夜に源氏は三条宮を訪れ、虫の音を聞きなが
ら琴を弾き、女三の宮と贈答 「大系」4-84、「新大系」4-76、「全集」

【翻字】

宮はおほひていよ／＼うとき御気色のまさるをを
こかましき御こゝろかなとかつはつらきものから哀
なりぬりこめもことにこまかなるものおほうもあら
てかうの御からひつみつしなとはかりあるはこなたかな
たにかきよせてけちかうしつらひてそおはしける
うちはくらき心ちすれとあさ日さし出たるけはひも
りきたるにうつもれたる御そひきやりなとして
ほのみたてまつり給ふ

【校異1】「湖月抄」下-127-8 / 「7」御そひきやりなとして↓御ぞひ
きやり、いとうたてみだれたる御ぐし、かきやりなどして

【校異2】「大成」4-1369（底本・大島本 飛鳥井雅康筆）

「2」ものからⅡ〈河〉全て（七毫源氏・高松宮本・尾州家本・平瀬本・
桃園文庫蔵・鳳来寺本・大島本）、〈別〉御物本・陽明家本・保坂本・国
冬本↓もの、「7」御そひきやりなとしてⅡ〈青〉三條西家本↓御ぞ
ひきやり、いとうたてみだれたる御ぐし、かきやりなどして ※全文一
致伝本…なし

【該当箇所】「36」夕霧は落葉の宮に思いを訴え、翌日もとどまる、落葉
の宮は塗籠から出て食事をする 「大系」4-162、「新大系」4-149、「全
集」4-465、「新全集」4-480、「集成」6-89、「文庫」7-147、「評釈」

四〇 御のり

【翻字】

たき、こるおもひはけふをはしめて此世にね

かふのりそはるけき夜もすからたうときことに

うちあはせたるつ、みのこゑたえすおもしろし

ほのくくと明ゆく朝朗霞の間よりみえたる花

の色くををはるに心とまりぬへくにほひわたり

でも、ちとりの囀るも笛の音をとらぬ心ちして

もの、あはれもおもしろさも残らぬほとに陵王の

舞てきうになるほどのすゑつかたのかくはなやかに

にきは、しくきこゆる○^にみな人ぬきかけたるもの、色

くなども物のおりからおかしうのみ見ゆ

【校異1】「湖月抄」下142-4 / 「9」きこゆる○^に聞ゆるに 「9」

みな人[↑]みな人の 「10」おりから[↑]折からに

【校異2】「大成」5-1384 (底本・大島本 飛鳥井雅康筆)

〔6〕囀る[〓]〔青〕肖柏本(傍書)、〔河〕御物本・七毫源氏・高松宮家

本・尾州家本・為家本・平瀬本・大島本、〔別〕全て(陽明家本・保坂本・

麦生本・阿里莫本) [↑]さへつり 「9」きこゆる○^に聞ゆるに 「9」み

な人[〓]〔青〕三條西家本(の「補入」、〔別〕保坂本[↑]みな人の 「10」

おりから[↑]折からに ※全文一致伝本…なし

【該当箇所】「3」紫の上は明石の君と歌の贈答、読経の声々、陵王の舞

のはなやかな美しさ 「大系」4-176、「新大系」4-165、「全集」4-

483、「新全集」4-497、「集成」6-105、「文庫」7-158、「評釈」9-42

四一 まほろし

【翻字】

中将の君東おもてにうた、ねしたるを歩おはして

見給へれはいとき、やかにおかしきさましておきあかり

たりつらつきはなやかに、ほひたる顔もてかくして

すこしふくたみたるかみのか、りなといとおかしけなり

紅のきはみたるけそひたるはかまくわんさう色

のひとへいとこきにひ色にくろきなとうるはしからす

かさなりてもからきぬもぬきすへしたりけるを

とかく引かけなとするにあふひをかたはらにを

きたりけるをとり給ひていかにとかやこのなこそ

わすれにけれとの給へは

さもこそはよるへの水にみくさるめけふのかさしよ

なさへわする、とはちらひてきこゆけにといと

おしくて

おほかたはおもひすて、し世なれともあふひは

なをやつみをかすへきなとひとりばかりはおほし

はなたぬけしきなり

【校異1】「湖月抄」下180-4 / 異同なし

【校異2】「大成」5-1415 (底本・大島本 飛鳥井雅康筆)

〔1〕中将の君[〓]〔河〕大島本、〔別〕全て(御物本・陽明家本・保坂

本・飯島春敬氏蔵・麦生本・阿里莫本) [↑]中将の君の 「2」見給へれ

は↓み給へは 「3」 顔 〓 〈青〉 三條西家本、〈別〉 御物本 ↓ かほを
 「4」 いとおかしけなり 〓 〈青〉 肖柏本・三條西家本、〈河〉 七毫源氏・
 高松宮家本・尾州家本・為家本・平瀬本・大島本 ↓ おかしけなり 「9」
 とり給ひて 〓 〈青〉 池田本・肖柏本・三條西家本、〈別〉 全て（御物本・
 陽明家本・保坂本・飯島春敬氏蔵・麦生本・阿里莫本） ↓ よりてとり給
 て 「15」 ひとりばかりは 〓 〈青〉 池田本・肖柏本・三條西家本、〈河〉
 大島本、〈別〉 御物本・保坂本・飯島春敬氏蔵 ↓ ひとりばかりをは ※
 全文一致伝本・なし

【該当箇所】「9」 祭の日、源氏は女房たちに見物をするよう勧め、中将
 の君と葵をめぐつての歌の贈答 「大系」 4-1207、「新大系」 4-198、「全
 集」 4-523、「新全集」 4-538、「集成」 6-143、「文庫」 7-186、「評釈」
 9-152

三 考 察

本稿では、御幸巻から幻巻までの十三帖を取り上げる。前稿「同志社
 大学文化情報学部蔵『源氏絵所屏風言葉書』翻刻と考察（桐壺巻）野分
 巻」(『文化情報学』第十三巻第一・二号、二〇一八年三月)に倣い、まず、
 「絵所」本文を『湖月抄』と比較してみると、「二九 御幸」「三〇 ふ
 ちはかま」「三一 梅かえ」「三六 かしは木」「四一 まほろし」の五
 帖については、『湖月抄』本文と全く一致することがわかる。

また、「三五 わかな下」「四一 まほろし」では、「大成」諸本には
 ない次の本文を、「絵所」は『湖月抄』と共通して持つ。

三五 わかな下 「7」 かきなてつ、↓かきなて、
 四一 まほろし 「2」 見給へれば ↓み給へは

ただし、前者は、「てつ、」と「て、」の部分は連綿の字形が酷似して
 おり、本文の不安定さに導かれた偶然の一致の可能性は否めない。ま
 た、後述するように、「三五 わかな下」の本文は、別の箇所において、
 『湖月抄』との異文が他に見出されるため、「絵所」が『湖月抄』を単純
 に引き写したとも考えにくい。一方、後者は、前述のとおり、『湖月抄』
 と全文が一致するが、「大成」諸本とはわずか一文字の異同である。し
 かしながら、「大成」諸本に見出されない本文を「絵所」と『湖月抄』
 がともに有する点には、ひとまず留意しておきたい。

実は、本稿で取り上げる十三帖の「絵所」本文には、脱字や誤写と考
 えられる箇所他、修正箇所も少なくない。
 脱字が想定されるのは、次の箇所である。

三三 藤裏葉 「1」 気色 ↓ 御気色
 三四 わかな上 「3」 名残 ↓ 名残まで
 三五 わかな下 「5」 たつね ↓ たつねて
 四〇 御のり 「10」 おりから ↓ 折からに

「絵所」は、『湖月抄』はもとより、「大成」諸本にも見られない、「御」「ま
 で」「て」「に」を欠く本文であることから、脱字の可能性を想定すべ
 きであろう。

また、次の箇所は誤写と見られる。

- 三一 まきはしら 「2」ひめ姫↕ひめ君
三七 よこふゑ 「5」笛竹の↕笛竹に

前掲の脱字の例と同様、右の「絵所」本文は、『湖月抄』および「大成」諸本にもない独自のものである。その上、文意も通らないことから、やはり単純な写し誤りであろう。

さらに、書き入れにより本文を修正している箇所は、次の三帖に、それぞれ一箇所ずつ見出される。

- 三三 藤裏葉 「1」給へり↕給へる
三八 すゝむし「7」ひきをこたり〇^給て↕ひきおこたり給ひて
四〇 御のり 「9」きこゆる〇↕聞ゆるに

修正本文は、いずれも『湖月抄』『大成』諸本と一致しており、安定した本文である。「三三 藤裏葉」の見せ消しと傍書は、おそらく書写直後に気づいて修正を施したものであろうが、その他二例も、いったん書写された後、おそらくそれほど間を置かないうちに、親本と照合した上で書き記されたのであろう。

これらの修正前の本行本文を含め、以上の用例は、すべて「絵所」の独自異文ということになるが、いずれも「絵所」本文の系統を把握しようとする際の手掛かりにはなりにくいと考えられる。

そのような状況の中で、注目すべきは、脱文と考えられる次の箇所である。

- 三九 夕霧 「7」御そひきやりなとして〓〈青〉三條西家本↕
御ぞひきやり、いとうたてみだれたる御ぐし、かきやりなどして

右の例は、本来、「御ぞひきやり、……御ぐし、かきやりなどして」とあるところを、「ひきやり」「かきやり」という類似文字列が、隣り合った行に並んで書かれていたために目移りし、「御ぞひきやりなどして」という本文に縮められてしまったものと推察される。おそらく親本を溯れば、一行十二、三文字で記されていたのであろう。この「絵所」本文は、『湖月抄』とも一致せず、「大成」諸本の中でも、唯一、青表紙本系統の三條西家本と同じである。「絵所」本文の系統を考える上で看過できない例である。

ところで、「絵所」と『湖月抄』との間に異文が生じている場合、前述のように「絵所」の誤写も多いが、「大成」諸本中に、「絵所」と同じ本文を見出すこともある。

- 三五 わかな下 「2」此宮〓〈別〉阿里莫本↕又この宮
四〇 御のり 「9」みな人〓〈青〉三條西家本(の)補入、〈別〉保坂本↕みな人の

わずか一文字程度の異同ではあるが、青表紙本系統の三條西家本の本文や、別本の阿里莫本、保坂本との共通性が知られる。

以上、「絵所」本文を『湖月抄』と比較し、異同箇所を「大成」によって検討してきたが、次に、『湖月抄』と共通する「絵所」本文の「大成」諸本中における位置付けを考察してみよう。

『湖月抄』と一致する「絵所」本文は五帖あるが、このうち四帖は、それぞれ次のような「大成」諸本と共通する。

- 二九 御幸 〈青〉肖柏本・三條西家本
 三〇 ふちはかま 〈青〉御物本・池田本・三條西家本
 三二 梅かえ 〈青〉三條西家本
 三六 かしは木 〈青〉定家本（底本）・大島本・肖柏本・三條西家本

ただし、「三二 梅かえ」は、音便の異同を考察から除外して考察している。

なお、残りの「四一 まほろし」には、全文が一致する「大成」本文は見当たらないが、「大成」底本（大島本・飛鳥井雅康筆）との異同六箇所のうち、以下の四箇所は三條西家本文と一致する。

- [3] 顔〓 〈青〉三條西家本、〈別〉御物本↕かほを
 [4] いとおかしけなり〓 〈青〉肖柏本・三條西家本、〈河〉七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・為家本・平瀬本・大島本↕おかしけなり
 [9] とり給ひて〓 〈青〉池田本・肖柏本・三條西家本、〈別〉全て（御物本・陽明家本・保坂本・飯島春敬氏蔵・麦生本・阿里莫本）↕よりてとり給て

- [15] ひとりばかりは〓 〈青〉池田本・肖柏本・三條西家本、〈河〉大島本、〈別〉御物本・保坂本・飯島春敬氏蔵↕ひとりばかりをは

やはり、「絵所」と青表紙本系統の三條西家本との共通性が目立つ。

なお、「三九 夕霧」は、前述のとおり、「絵所」の脱文箇所が青表紙本系統の三條西家本と一致するが、一方、次の箇所では、河内本諸本と別本の一部と共通し、青表紙本系統の本文とは対立する。

- [2] ものから〓 〈河〉全て（七毫源氏・高松宮本・尾州家本・平瀬本・桃園文庫蔵・鳳来寺本・大島本）、〈別〉御物本・陽明家本・保坂本・国冬本↕もの、

本稿の考察範囲内では異色の本文傾向である。

以上の考察から、「絵所」の行幸巻から幻巻の本文は、『湖月抄』に一致する巻もあるが、独自の誤写と見られる箇所も少なくなく、また、青表紙本系統の三條西家本に近い箇所が目立つということがわかる。前稿で取り上げた桐壺巻から野分巻において、河内本系統の本文の影響は比較的少なく、別本の本文を有する箇所が少数ながら見られたことを考慮すると、右の「ものから」の例は、河内本系統というよりはむしろ、別本の本文との共通性を重視すべきか。

ところで、本書が抜き書きしている『源氏物語』本文は、いったいかなる図柄を指しているのか。そこで、以下、承応三年（一六五四）版『源氏物語』（略称「承応版」）の挿絵に照らして推測してみたい。

- 二九 御幸〔全2図。うち見開き1図。〕該当図なし
 三〇 ふちはかま〔全2図〕 第1図に該当
 三一 まきはしら〔全4図〕 第3図に該当

- 三二 梅かえ〔全2図〕 第2図に該当
- 三三 藤裏葉〔全3図〕 第1図に該当
- 三四 わかな上〔全8図。うち見開き1図。〕 第4図に該当
- 三五 わかな下〔全7図〕 該当図なし
- 三六 かしは木〔全4図〕 第1図に該当
- 三七 よこふゑ〔全2図〕 第2図に該当
- 三八 すゝむし〔全2図〕 第2図に該当
- 三九 夕霧〔全6図。うち見開き1図。〕 第6図に該当
- 四〇 御のり〔全2図〕 該当図なし
- 四一 まほろし〔全3図〕 該当図なし

「承応版」には、御幸巻から幻巻まで、巻ごとに二〜八図が収められているが、「絵所」本文が「承応版」の挿絵と共通するのは九帖である。

残りの四帖のうち、「二九 御幸」「四〇 御のり」については、『源氏物語絵詞―翻刻と解題―』（片桐洋一・大阪女子大学物語研究会編著、大学堂書店、昭和五十八年一月）に、該当箇所が引用されている（五五・五六頁、および八〇・八一頁）。

また、『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』（秋山虔・田口栄一、学習研究社、一九九七年四月）に拠れば、「絵所」の「三五 わかな下」に該当する図柄は、京都国立博物館本光吉画帖や土佐派画帖色紙などに見られる。

残る「四一 まほろし」の「絵所」が挙げる場面は、葵をめぐる中將の君との贈答であり、本帖の挿絵の類型、すなわち、紫上の死に関連した場面とは一線を画す。紫上の死を悼む場面をあえて避けるという意図

があったものと推察される。

今後もし引き続き、より多くの源氏絵を視野に入れた考察が必要であろう。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇一八年度春学期の授業「日本古典文学情報特論1」の内容の一部である。山本愛奈（行幸・若菜下）、李羽（藤袴・柏木）、耕三寺華蓮（真木柱・横笛）、大久保孝晃（梅枝・鈴虫）、徐嘉楓（藤裏葉・夕霧）、胡淑雲（若菜上・御法）が、それぞれ各巻の演習を担当した。その後、これに幻巻を加え、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究科第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも平成28〜30年度）の一環として、さらに検討を加えた。